

IV 日本における共食のかたち

3 独居者たちの共食論理



イラスト / matsu (マツモト ナオコ)

「尻軽」^{モバイル}な街コンからスカイク飯まで 独居者たちの共食論理

一 家族の共食、 独居者の共食

人類の共食はどこから来て、どこへいくのか？

霊長類学者・山極寿一は、家族という人類固有のシステムを「奇妙」という。「ここ（引用者注・インセストタブーと共食）に人類が生み出した何とも奇妙な社会性が象徴的に表現されている。本来所有の難しい性の相手を互酬性に基づく交換に用いて、その所有を共同体によって合意し、所有の生じやすい食を徹底的に分ち合うことによつて葛藤を抑えたのである。それは複数の家族が集まってより大きな共同

体を作る上で不可欠なものだった」。

*山極寿一「暴力はどこからきたか！ 人間性の起源を探る」二〇〇七 NHKブックス

ただ、互恵的な利他行動としての食の分ち合いは、人類固有のものではない。昆虫のアリやハチに血縁間の分ち合いが見られるのはもちろん、ドラキュラの申し子、チスイコウモリに、血縁を超えた崇高な分ち合いが見られる。みごと吸血採餌に成功した個体は、ねぐらに戻るや、その日吸血に失敗した個体（非血縁を含む）に血を吐き戻して与える。三日飢えると即、命に関わるため、この相互扶助（献血か喜捨か？）なしには、チスイコウモリのコミュニティは成り立たない。

*三浦慎悟『哺乳類の生物学』④社会一九九八 東大出版

Profile

武庫川女子大学生活環境学部
情報メディア学科 教授

藤本 憲一

(ふじもと けんいち)

1958年生まれ 兵庫県出身
専門分野●情報美学、メディア環境論

著書●『ポケベル少女革命』、『ポケベル・ケータイ主義！』（共編著）、『戦後日本の大衆文化』（共編著）

さて、緊急災害時の助け合いや国連WFPの活動を別とすれば、少なくとも二一世紀の先進国の家族や社会にとって、もはや食(料/事)の共有は、大きな規定要因ではない。家族を超えた共同体は、食の分かち合いではなく、法・国家システムや、言語・インターネットのコミュニケーションによって成り立っている。第一次産業で得られた食料資源は、経済と流通に媒介され、社会全体に共有されている。

山極が「家族制度の両輪」と指摘する、一方のインセスタブーが、社会秩序の根本にあるのと対照的に、他方の共同体における共食の絆は、今や「子育て給餌」や、「異性間の婚姻贈呈」(オスガメスを交尾に誘うための求愛給餌)という低次元にまで、縮退しつつあるように思われる。

もちろん、家族は現在も、最高の共食単位である。家族を対象にした調査によると、「料理を作る側」の「ベストの食事」とは、「健康によい食事を作れた達成感と家族からの賞賛」であり、「料理を食べる側」の「ベストの食事」とは、「好きなものをたくさん食べる

こと、楽しいこと」であった。そして、両者が声をそろえて「理想の食事は、家族との食事」と語った。ここに幸福感に満ちた団らん、まどいの原型がある。

*三島順子「あなたの理想の食事相手は誰ですか?」
日々の食事についてのインタビュー調査から」CELE
(二〇)二〇二五

ここでは思考実験として、いったん家族やコミュニケーションという枠組を取り払い、単独者たる個人にとって、共食にどんな意味があるか。新しい共食のかたちを探ってみたい。

期せずして、若者の晩婚化と高齢者の独居化にともない、日本をはじめとする先進国では、家族同居者が減り、独居者(=孤食者)が増加中である。はたして、独居者の目に、共食はどのように映っているか? 特定の共食相手や共食単位をもたない独居者は、食事機会ごとに一人で食べたり、そのつど不特定の誰かと食べたりと、つねに選択し、同時に誰かに選択される淘汰圧にさらされつつ、あえて独居を選び続けている。大きな孤食ストレスのなかで、日々一人で/ともに食べる楽しみ

を追い求めてもいる。おのずから家族居住者とはちがう、風景と論理をもつのではないか。

二 街コンとバル

たとえば、「街コン」。文字通り、「街規模の合コン」である。参加者が千人を超えるものもあるとか。

たまたま、この「街コン」地帯に足を踏み入れると、ふだん^ど人気がない裏通りまでが、まるで縁日のようにざわめく、つかのまカルチェ・ラタン(解放区)に変わる。飲食店の外まで若者たちがあふれかえり、店外のスツールやビールケースにさえ座りきれない者は、立ったまま飲み食いしている。日・時間・区域・参加店舗を限って、客は定額クーポンでハシゴしつつ、軽食と酒を楽しめるから、原理的に食い逃げはない。

キホン出会い目的であるから、男女入り混じって、笑いさざめいているが、昭和世代の学園祭のように盛りがつかない。声を荒げて相手の取り合いをするでなく、平和的にダラダラ、

ゆるゆると低いテンションで、男女が語り合うのは、さすが平成の草食系。いや巷間で言われるように、「街コン」は出会いじゃなく、旨いメシ目当て」だからか。

おっと、この多幸感、どこかで見たぞ。そうそう！ 若者に住みよい街とされる三軒茶屋、下北沢、吉祥寺あたりだ。こうした草食系男女グループのゆるゆる多幸飲食が、日常的に見られるのは。実は、住みよい街は、「毎日、街コン」なのだ。一人でふらふら出かけてもよし（異性と出会えるかも）、同性グループで出かけてもよし（別のグループと話せるかも）、誰かと出会わなくても、旨いメシ目当てにツマミ一品、ビール一杯でハシゴしてもよし。飲食店と仕舞屋（自宅・アパート）が接近している都心郊外で、女性一人でも夜遅くまで安全な街……。旧世代の盛り場・新宿の、ハイテンションな男女共食とは、あきらかに違う。

三 草食系かつ尻軽

「街コン」以外にも、独居者（とくに

若者）の共食トレンドは、まぎらわしい表現だが、草食系かつ尻軽だ。ここでは、「尻軽」というネガティブな表現に、あえて「遊動的（モバイル）／一見（ズ）的（テンポラリー）／敷居が低い（アクセシブル）」という一連の美学概念を与えてみたい。

ひとことではいえば、おしなべて食べる相手選びは淡白で、尻が軽く（店選びや相手選びが一見で遊動的）、店や相手を固定する常連的な態度をとらない。尻（座席に腰を収める深さ）が浅く、尻（滞在時間）が短い。あえて「ひとつとところに尻を落ちて着けないのが粋」とでも言いたげな、江戸っ子気質（？）があるようで、ときに立ち飲み立ち食いも「あたぼう（ウエルカム）」である。ま、見た目はまったり、のらくらしているが。

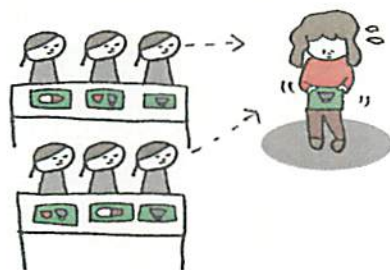
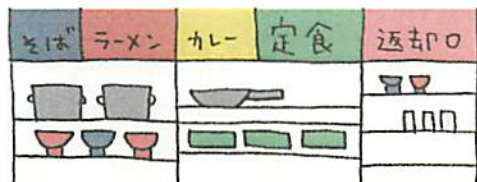
ここ数年来、高級店ではなく、チープなコンビニやファストフードで、「尻軽」な流行の風が起きている。

日経MJヒット商品番付（二〇一五上・前頭）として「ちよい飲み」、（二〇一四・関脇）として「イトイン」が挙がる。

「ちよい飲み」とは、バーや居酒屋に腰を落着けるのではなく、ファミレスや牛丼屋で、食事のついでに「ちよいと飲む」行為。「イトイン」とは、物販やテイクアウト（中食）中心のコンビニやデパ地下で、「ちよいと食べる」コーナーや食事を指す。

立ち食いで本格料理を提供する「俺の〇〇」がランクされたのは、（二〇一二・前頭）。今や「俺の〇〇」は、イタリアン、スパニッシュ、割烹など、三〇店舗を数える。

二〇一二年は「街コン」元年でもあり、日経トレンドイット商品番付（二〇一二・九位）にランクイン。別名「街バル」とも呼ばれるが、それは既存店が、「街コン」に動員される中で、いやおうなく「バル業態化」してしまう含みを持つ。「バル（Bar）」とは、カフェと居酒屋を兼ねた「スペイン・バル」の略。ツマミとして、「タパス」（小皿）、「ピンチョス」（カナッペ風フィッガーフード）を安く手早く提供し、気軽に尻軽く、尻短く出入りできる「尻軽」店の典型。古びた小体な居酒屋でさえ、「バル対応」させられてしまう結



果、ふだん寄りつかない若者にとつて
尻軽く、尻浅く、尻短くアクセシしや
すい、「あそこ、わりかし使える」店と
なる。

四 おひとり様とぼっち飯

次に、共食とは真逆の「おひとり様」
ブームを取り上げてみよう。寂寥感漂
う「孤独」でなく、まなじり決した「孤
高」でもなく、接客用語に由来すると
おぼしき「おひとり様」には、飄々と一
人をエンジョイする軽みがある。

ふだんは家族・友人・恋人と「リア
充」を楽しめているけれど、きょうは

「たまたま一人」と
いうスタンスか。
いや、もつと前向
きに「あえて、わ
ざわざ一人」とい
うポジティブな響
きだ。「ひとり焼
肉」など飲食場
面だけでなく、「ひ
とりカラオケ」「ひ
とりティーパパー

ク」と、文化として広がりつつある。

この余裕しやくしやくの「おひとり
様」も、ほんの紙一重で、悲惨な「ぼっ
ち」へ転落してしまう。紙一重とは何
か？ おそらく、行為の持つ「志向性
(インテンションナリテイ)」の違いだ。

たとえば、本(文字/テキスト)を読
む行為は、一人が当たり前で、誰とど
もに読むか、なんて気にならない。口
をキリリと閉じ、前面に視線と意識を
集中し、対象に没入する「テキスト志
向」の強い、閉鎖/集中的行為だから。
本を置くと、家か図書館か電車かカ
フェか、周りの雰囲気(コンテキスト)
が、ふと気になりもする。

料理(テキスト)を食べる行為は、そ
れとは逆だ。視線と意識を前面に集中
し、対象(カニとか)に没入する「テキ
スト志向」の強いケースは例外的。む
しろ食べる相手や周りの雰囲気(コン
テキスト)に気が向きがちな「コンテ
キスト志向」の強い、開放/拡散的(な
がら)行為だ。読書は、誰とどこでよ
りも、何を読むかが重要。飲食は、何
を食べるかより、誰とどこでが重要な
のだ。

また、文字/本に向かって視線の矢
印を射抜く、読書という攻撃的・能動
的行為に対して、自ら開口部をひらき、
外部の異物たる料理を体内に招き入れ
る飲食行為は、友好的・受動的である
(カラオケなどは、両者の中間か)。

その意味で、飲食行為のうち、相手・
雰囲気(コンテキスト)を封印し、大
好物(テキスト//ラーメン・焼肉とか)
に集中するべく、「わざわざ一人」を選
択する行為が、「おひとり様」である。
逆に、凡庸な料理(テキスト//学食ラ
ンチとか)を前に、相手・雰囲気(コン
テキスト)すら選択できず、「しぶしぶ
一人」「いやいや一人」を余儀なくされ
るのが、「ぼっち飯」。

ふだん「リア充」をきどつていても、
今、この瞬間「一人」でいるのを見られ
て恥ずかしい」場面だ。ワンフロア数
百人の学食は、「ぼっち飯」の温床。こ
んなに学友がいるのに、自分に気づい
ていくせに、誰ひとり声をかけてく
れない。わが人望のなさを羞恥ととも
に、衆人環視される辛さ……。

「ぼっち飯」地獄に陥らぬよう、その
前に「ぼっち受講」にならぬよう、学生



は三々五々、集まろうと試みる。「ぼっち受講」になるやLINEで連絡を交わし、情報戦に走るが、時すでに遅し。そのまま敗れて食堂入り……でも誰か来てないかなと左右に目を泳がせる。この姿を「キョロぼっち」と呼ぶ。ついにランチメイト同伴の夢破れ、もそもそと学食を口に運ぶ。「あの子、ぼっち飯だ」という囁きは、見知らぬ他人ではなく、見知ってはいるけれど親しくない知人たちの、棘ある視線だ。

飲食場面でなければ、背を丸め、脇を固めてスマホを握り、液晶画面だけ見つめ、前のめりに突っ伏してればいい。ダンゴムシのように、独我を閉ざして築かれたスマホ城、その孤塁は鉄壁だ。ところが、スマホから手を離し、食べ物を箸で運んだ瞬間、口が開き、心のバリアがほころんでしまう。笑い泣くのと同じく、もの食う行為もまた、難攻不落のスマホ城が、開口部から蕩けてしまう時。ランチメイトを求め、スマホ城にこもる淋しがりやの独我が、

白旗を上げる瞬間だ。

孤塁を保つべく、物理的な遮蔽物を欲しがる者もいる。それが、隣席とのあいだに衝立を設けた「ぼっち席」であり、より極端な防壁構築が「便所飯」であろう。最近の洋式トイレは、ホット便座やウォシュレット、音姫を完備、安全清潔で、何時間でも快適に過ごせる、とびきりの「セーフハウス」。四方のイジワルな視線から身を隠し、天陰の要害に腰掛け、両耳にイヤホン、片手にスマホとおにぎり・サンドイッチをかざせば、そこは鉄壁の「窓のないモナド」となる。

五 スカイプ飯とサロゲート・ダイナー

「物言えば 唇寒し 秋の風」(芭蕉)をもじっていえば、「物食えば 唇淋し ぼっち飯」。ときに優雅な「おひとり様」を気どってみても、口を開いた瞬間、孤独な魂は、つい誰かをもとめて……ある意味で、共食への健全な憧憬である。ひとりスマホで写メを撮る「孤独のグルメ」もいいが、誰かとシエ

アする楽しみは格別だから。

自宅での「ぼっち飯」が味気ないなら、スカイプやSNS(ソーシャルネットワークサービス)のビデオ通話アプリを使って、リアルタイム・オンラインで二人から数人で対面しつつ、ともに飲み食いする、通称「スカイプ飲み(スカイプ飯)」「ソーシャル飲み(ソーシャル飯)」という裏技がある。

直の対面と違って心理的距離が遠いため、相手と「間」があき、文字通り間意(まごころ)つこしいが、これも一つの共食の風景。モニター越しに会話しつつ、片手にスマホ、片手に箸をにぎり、部屋のテレビや音楽もつけっぱなし、スーパー「ながら」行動になりがちだ。

こんな情けない零落形態は、共食といえるのか? 思わず微笑する、この「スカイプ飯」「ソーシャル飯」であるが、実は、独居高齢者の孤食対策(ソリューション)として、大いに期待されている。

情報工学系研究者お二人の論文を紹介しよう。井上・塩原両氏による新しい共食提案は、孤独な高齢独居者の未来を見すえている。

両氏が提案するのは、PCモニター上のエージェント（遠隔操作により、人間に準じた挙動をおこなうCGキャラクター）を活用した、独居者（彼らの用語では孤食者）を支援するための疑似な共食システムである。名づけて、「サロゲート・ダイナー」（代理の食事相手）。彼らのグループだけでなく、世界的に見て、こうした遠隔共食システムの開発はいくつか試みられており、国際的IT企業アクセンチュアによるものは、virtual family dinnerと呼ばれている。はたして、幸福な食事と呼べるかどうかは、今後の研究しただいだが、まさに「神人共食」ならぬ、「机（機）人共食」ともいうべき新機軸であろう。

*井上智雄・塩原拓人「ゆとりある食事のための食事エージェントシステム」(二〇一四)情報処理学会論文誌(DCOM)212。塩原拓人・井上智雄「遠隔非食事者との疑似共食」コミュニケーションのためのインタフェースエージェントSurrogate Diner」(二〇一四)情報処理学会論文誌(DCOM)212

以上、述べてきたように、家族同居者たちと異なる風景ではあるが、独居者たちもまた、真摯に「幸福な共食」のカタチを模索している。

若者の場合、デートをのぞけば、野外バーベキューにせよ、外食にせよ、席を自由に動けて、メニューの追加や更新が自在な、草食系かつ尻軽なベクトルが見られた。これに逆行する、核家族という固定メンバー限定で共食を強いる、観念的な食育イデオロギーは、彼らにとつて、不自由な強制として映るため、かえって晩婚化・少子化に拍車をかけてしまうおそれがある。かといって、フランス的な事実婚が、新しい共食単位になりうるかどうかも、まだまだ未知数だ。

いずれにせよ、同棲や出産を経たカップルであっても、週に一、二回は既知メンバー、未知メンバーが半々くらしいの、ゆるやかな草食系ホームパーティや、野外バーベキューを開けるような、新しい共食文化の創造と、若くて貧しい彼らを施設・サービスマンからサポートしていく、真の「共食育システム」の構築が待たれるところだ。たとえば、「サロゲート・ダイナー」をより洗練した試みとしては、「sync dinner」がある。全面、液晶モニターでできた壁一面の鏡体を通して、遠く

離れた人々が、リアルタイムで対面し、語り合い、会食するauによる社会実験である(<http://sixinc.jp/#work/au-sync-dinner/>)。

同様に、高齢独居者もまた、単に福祉や介護の対象としてだけでなく、血縁地縁に依存しすぎない、ゆるやかな出会いと、離合集散が可能な共食ネットワーク構築によって、主体的に食べる相手を選ぶ方が期待されている。

しかしながら最終的には、独居者にとつての共食の新しいカタチは、あまり教育や行政に期待し過ぎることなく、自分たちの手で一つ一つ積み上げていくプロセスに意味があるのかもしれない。

【参考文献】

- 藤本憲一「ラッコの食卓——家郷卓／外野点風景論序説『助成研究の報告5』一九九五（財）味の素食の文化センター
- 藤本憲一「SHIHOJINの距離学——若者の「ネット」をめぐり、『謎を解く』『TASC MONTHLY』(154)二〇一三（財）たばこ総合研究センター
- 藤本憲一「「コンビニ」——人見知りどうしが集う給水所」(近森高明・工藤保則編『無印都市の社会学』二〇一三 法律文化社)

食文化を楽しむ一冊

2015年11月1日発行
(2、5、8、11月の各月1日発行) 第100号
ISSN 0918-0214

vesta

2015 AUTUMN

NO.100

特集

きょう しよく
共食 一食のコミュニケーション

100号
記念企画
「食の本棚」



**vesta**(食文化誌 ヴェスタ)第100号(2015秋)2015年11月1日発行
定価771円(本体714円)送料110円

編集・発行

公益財団法人 味の素食の文化センター

〒108-0074

東京都港区高輪 3-13-65

味の素グループ高輪研修センター内

TEL 03-5488-7318

FAX 03-3445-7965

ホームページ <http://www.syokubunka.or.jp>

発行人：伊藤 雅俊

編集顧問：江原 絢子 高田 公理 武井 秀夫

沼野 恭子 前川 健一

編集人：小林 顕彦

販売

一般社団法人 農山漁村文化協会

〒107-8668

東京都港区赤坂 7-6-1

TEL 03-3585-1141

FAX 03-3585-3668

振替 00120-3-144478

ホームページ

<http://www.ruralnet.or.jp/>

雑誌 07905-11



4910079051154

00714